



No.36

げんきカエル



こども病院ニュースレター

新年のごあいさつ

「兵庫県立こども病院の 早期建替整備に向けて」

病院長 丸尾 猛



新年おめでとうございます。

当院は昭和45年に全国2番目の小児病院として開設され、42年を迎えます。こども達の最後の砦となる高度専門医療は昼夜を問わず大きなマンパワーを要しますが、職員一体となった取り組みと小児周産期の診療報酬改定が原動力となり、当院開設以降初めて平成20年度にプラスに転じた収支損益は、その後の病床稼働率アップに伴って年毎に大きく改善され、上向き気流で新年を迎えることができました。これはひとえに、職員の皆さまが「待ち受ける医療」から「集まる医療」へと姿勢を転換し、積極的にご協力下さったおかげであります。

当院では入院患児の重症化が進み、常に45名前後の患児が人工呼吸器管理下にあり、ICU病棟とNICU病棟を越えて老朽化した本館病棟へ20台余の人工呼吸器が入り込み、最近では人工呼吸器で維持できない重症児のためECMO(体外膜型人工肺)が複数台同時に動くことがしばしばで、緊迫した状況となっています。このような高度専門特殊医療を老朽化した本館を舞台に実施するのは、安心・安全を担保する上で難しいと感じ、早期建替の実現に向け、新病院のビジョンにつき各部署で意見交換を重ねて参りました。県当局のご理解と有り難いご支援によって昨年6月には建替整備基本構想が公表され、パブリックコメントを受けて建替整備基本計画の策定が鋭意進められています。当院建替整備は、昨年に厚労省に提出された兵庫県地域医療再生計画に組み込まれており、ハイスピードで建替

整備スケジュールが動いています。将来を見

据え、次世代に自信をもって託せる患児・家族に優しい新病院の設計が、今年度の最重要課題であります。当院の早期建替整備に向け大きく舵をきって下さった県当局の大英断に、職員一同、感謝の気持ちで一杯です。

昨年もシアトル小児病院へ1か月間派遣した若手医師3名と看護師1名が、分野別の専門研修トレーニングを受け、意義深い報告をしてくれました。彼らの研修報告は当院ホームページの国際交流欄に公開されています。海外トップランク病院での専門研修の場の提供は、若手職員のモチベーションを高め、新病院設計に際して斬新なアイデアとして活かされると信じます。

新年を迎え、皆様方にとって素晴らしい一年でありますよう祈りますと共に、今後もより一層の医療連携をお願い申し上げます。



最新CT装置が導入されました

検査放射線部 服部 真吾

昨年9月、160列MDCT装置・東芝製「Aquilion PREMIUM」が増設されました。

新装置は、ベッドを動かさずに最短0.35秒で体軸方向に80mm(0.5mm×160スライス)の高速撮影が可能で短時間で検査を行えるので、動いたり息止めのできない小児の撮影に威力を発揮しています。また、近々最新の逐次近似法を応用した被ばく低減技術AIDR3D(Adaptive Iterative Dose Reduction 3D)が導入されます。このシステムは低線量でも高画質な画像が得られるので被曝の大幅な低減がなされます。また、検査中のDVDの鑑賞も可能となり今まで以上に子供さんが安全・安心して検査が受けられるようになりました。



「臨床工学技士の仕事」

臨床工学技士 主任 横山 真司

臨床工学技士(ME:Medical Engineer)とは、「生命維持管理装置」の操作および保守点検を行うことを業とする医療機器の専門医療職種です。

臨床工学技士の業務は臨床業務と医療機器管理業務の大きく2つに分けられ、こども病院では臨床業務として人工心肺業務、補助循環業務(ECMO)、PICUなどで行う急性血液浄化業務、側弯症手術時のMEPのモニタリング、自己血回収業務、血液腫瘍科で行われる末梢血幹細胞採取時の装置の操作などを行っています。

また、医療機器管理業務においては医療機器の安全性向上と効率的な運用を行うため、人工呼吸器や輸液・シリンジポンプなど700台以上の機器を中央管理化し、保守点検を行っています(約6500件/年)。そのほか、医療機器の故障時の修理(約600件/年)や定期点検、勉強会の開催や医療機器の様々な

相談に対する対応などを行っています。

現在4名のスタッフでこれらの業務に対応しています。まだまだ対応しきれない業務が多く、ご迷惑をお掛けしていると思いますが、安全で質の高い臨床業務、安全な医療機器を提供できるよう今後も努力していきますので、よろしくお願いいたします。





こども病院に青あざ、茶あざの レーザーが入りました!

形成外科医長 大山 知樹

形成外科ではいままで、赤あざ用のレーザー(色素レーザー)のみでしたが、昨年ついにQスイッチルビーレーザーが導入され、今まで他院へ紹介させていただいていた青あざ、茶あざのレーザー治療も可能となりました。

赤あざ

① サーマンパッチ

新生児にあるまぶた、前額、眉間などの赤あざで1才半くらいまでに自然に消えます

② 単純性血管腫

サーモンパッチ以外の部位にできる盛り上がりがない赤あざ。自然に消えることはなく、大人になると色が濃くなってきたり盛り上がってきたりもします。顔半分にある時は眼や脳の合併症にも注意が必要です。治療には色素レーザーを照射します。

③ 莓状血管腫

生後1,2週ごろから最初は小さく、平坦だったものが徐々に赤々と盛り上がってきます。1才くらいまで増大し、その後5才くらいまででゆっくり縮小していきます。基本は様子観察ですが、平坦なうちに色素レーザーをあてて盛り上がりを食い止めたり、まぶたや口まわりなどで機能的に問題があるときは、ステロイドを注射したり、内服したりします。

青あざ

① 蒙古斑、異所性蒙古斑

蒙古斑は生後まもなくから、お尻や腰背部にできる青あざで5才くらいまでに消失します。通常の場所以外にできるものを異所性蒙古斑といい、成長とともに薄くなる場合もありますが、ならない時は治療の対象になります。Qスイッチルビーレーザーを照射します。

② 太田母斑

顔の片側の特に、目のまわりにできる青あざです。生まれつきある場合と思春期頃に現れる場合

があります。こちらは自然に消失することはありません。やはりQスイッチルビーレーザーで治療します。

茶あざ

扁平母斑あるいはカフェオレ斑ともよばれます。Qスイッチルビーレーザーで治療しますが、他の色にくらべ再発することが多いです。茶あざの数が多い場合は神経線維腫症という病気の鑑別が必要になることもあります。

黒あざ

一般に“ほくろ”といわれるもので、色素性母斑といえます。小さいものは焼灼したりしますが、基本的には手術で切除します。

白あざ

白斑とよばれます。こちらは皮膚科治療の対象となるため、皮膚科専門医を御紹介させていただいています。

お子さんのあざでお悩みの方は、形成外科を御受診ください。



医師クラークを紹介します

総務部次長兼総務課長 長尾 洋

こども病院では、医師の業務負担を軽減して、本来の診療業務に専念できる環境を整えるために、医師事務作業補助者(医師クラーク)を配置しています。

本館1階の医局に隣接して、医師クラーク室があり、現在8名のクラークが在籍しています。

西島副院長、小阪診療部長の指導の下、医師のサポートを行って、当院の高度専門医療の推進に貢献しており、今後ますます重要な役割が期待されています。



Concept

コンセプト

基本理念

周産期・小児医療の総合施設として、母と子どもの高度専門医療を通じて、親と地域社会と一体になって子どもたちの健やかな成長を目指します。



基本方針

1. 患者の権利を尊重した医療の実践
2. 安全・安心と信頼の医療の遂行
3. 高度に専門化されたチーム医療の推進
4. 地域の医療・保健・福祉・教育機関との連携
5. 親と子どもが一体となった治療の推進
6. 子どもへの愛とまことに満ちた医療人の育成
7. 医療ボランティアとの協働による患者サービスの向上
8. 継続的な高度専門医療提供のための経営の効率化

編集後記

新年明けましておめでとうございます。

今年は当院にとって新築建替整頓に向けて非常に大きなスタートの1年になると思います。また、「げんきカエル」も医療のおかずで9年目を迎えました。これからも、より充実した紙面にしてまいりますのでご協力よろしくお願ひします。

編集委員長：橋本ひとみ
編集委員：田中亮二郎 植垣美香子 竹井 用子
松本 伊子 服部 典君 赤松 翔子
長尾 洋

本誌に関するご感想・ご希望・ご質問はこちらまで



兵庫県立こども病院

周産期医療センター 小児救急医療センター

〒654-0081 神戸市須磨区高倉台1丁目1-1
TEL 078-732-6961
FAX 078-735-0910(総務課)
FAX 078-732-6980(予約センター)
URL: <http://www.hyogo-kodomo-hosp.com/>
E-MAIL: info_kch@hp.pref.hyogo.jp